

Are you Mr. Qwez? うと
か次長かが面会に来たが、私に会
とはな。一たよんた 一日電信局長

びつくりしたような

いた。大実業家に敬意を表しにきたところ、そこに一介白面の青年を見出して驚いたのだと、先方の告白するところであった。

しかるにこうして非常に張り切って仕事をし、また実績も大いに

上がっている時に、突然本店から電報で帰還を命令してきた。私に
とっては文字通りの寝耳に水で、殊にこれから欧米の大支店で雄飛
しようと思つていただけに、大い
に不満であった。しかし何といつ
ても本店の命令であるし、また仕
事をやり過ぎて胃の調子も悪くし
ていたので、一先ず帰国すること
にした。帰国してからわかつたと
ころでは、これはKの中傷に基く
もので、私の無実はすぐとけた
が、その詳細については省略す
る。

シンがどがその仕方裏閥の文商も、目につくものは片っ端しから読んでいた。これが後年参議院議員時代に、石炭国家管理法案の審議に当って、時の商工大臣社会党の故水谷長三郎に向って、いわゆるイデオロギー論争を買って出たのである。

しかしこの全く仕事らしいものがない時代にも、私としての手腕を發揮して、人を驚かせたことはある。当時イギリスにブラナーモンドという会社があつて、これがソーダ灰の市場を世界的に独占していたが、この会社の手口たるや、競争者が出るとダンピングをして売り叩き、その巨大な資力にものをいわせて屈服させ、その上で対手を買収してしまうのである。この会社はこの手で合併して重ねて大きくなり、その後他の大化学会社三社と合同して、現在のICIになっている。

この「プラナーモンド」が太陽曹達に對して攻略の手を伸ばし、例の手段で月印曹達灰をダンピングしてきた。こちらはマガジ湖産の採集費と運賃だけですむ天然自然のものなのに、それでも競争ができるほどに値を引下げてきた。これではとても堪らぬというので、関税について幹部がいろいろ運動す

次官岡本英太郎が、私が一つ橋から農商務省に下りて端の役人を対手にしているのでラヂがあかない。そこで私が見るに見かねて、時の農商務省の勤任技師で、関税問題について代に知遇を受けた農大の脇永博士と夫人の実弟であった関係から、これを訪ねて陳情した。また大蔵省は当時最高権威といわれた矢部久治が群馬県人なので、ここに向いて折衝した。何しろその頃は、官尊民卑の風がまだ頗る盛んな頃だったので、一白面の青年社員が次官や勤任技師に直接交渉に行くことなどは、普通ではとても考えられぬことで、当時から私はそんな政治的手腕があつたらしい。なおこれは後になつてからだが、マガジン達会社もどとの詰りは、プラナーモンドに吸収合併された。

改造理念を持っていた。この藤原は大正十三年の清浦内閣と護憲三派が対決した総選挙にも立候補したが、その時には私は鈴木の幹部の暗黙の諒解のもとに、約一ヵ月間も殆ど社には顔を出さずに、応援演説に東奔西走し、私の演説は大いに聴衆を湧かせたが、残念ながら落選した。

しかしこの縁からやがて同志相寄って『立憲青年党』を結成し、藤原が総裁となり私は筆頭総務になつた。そのうちに藤原と相談して同志を募り『アジアはアジア人によつて……』をスローガンとして、西欧の支配下にあるアジアの各地に独立の気運を振起すべく、全アジアを遊説する計画を立てた。私はこの時は鈴木商店もやめて、この遊説を行する考え方であつたが、資金の不足その他から実現するに至らなかつた。

またその頃、家の縁先に有松昇竜という男がいて、東京米穀取引所の一流仲買人となつて巨万の財をなしていたが、これが私の親戚のなかのただ一人成功した商売人である。そこで私はそのまま鈴木にいたところでウダツが上がるぬから、有松の店に入つて米穀取

引で大いに成功しようと思い、とざわざ神戸から家内と一緒に上言して、有松の豪莊な邸宅を訪問し、『使つて貰えなか』と頼みこんだ。すると有松からはいけない。米の仲買などは、成功よりは失敗の方が多いのだ。君はまだ若いし、鈴木は大した会社だ。人間、時には日蔭もある。慌てて職業を代えなどは以前のこととて、今暫く辛抱してみる』と懇々とさとされて、ここに私は豁然として覚るところがあつて、長い人生航路を乗り切るのに、往々一喜一憂してはならぬと、翻然と心を入れかえたのであった。

ところが世の中はよくしたもので、鈴木商店がフランスから導入したクロード式空中窒素固定法による硫安合成功場を、山口県の辺島に建設することとなつて、その事務的な方面を磯部房信氏が受はつたので、私もこの建設に参画することとなつた。このクロード法というのは、一千気圧もの高圧で空中の窒素を固定するもので、本家のフランスでもまだ工業的にも画期的な事業であった。私は漸く仕事らしいものにあり

つき、それにこの仕事が面白くま
た有望なものなので、非常に張り
切って勉強したものであった。そ
れだから工場が落成して、朝野の
知名士を招待して社長の伊藤乙次
郎海軍中将が挨拶することとなっ
た時には、私はその原稿を進んで
引き受けた。その頃は空中窒素固
定については、国内には殆ど文献
らしいものはなかったので、私は
英文の原書数冊と雑誌類を克明に
読んで、この原稿をまとめ上げた
のであるが、その出来映えが頗る
良く

『誰があの原稿を書いたのだ』
『大屋晋三だ』

と、関係者の間で注目をひいた。
そうこうするうちに大正十四年
に入ると、クロード窒素の事業も
次第に進捗したので、八幡製鐵の
排気ガスから水素をとつて、これ
に窒素を加えて硫安を作る大工場
の建設が計画され、その建設事務
所長に私が擬せられていた。そこ
にまたまた鈴木のロンドン支店に
欠員ができて

『Strong young man を一人
よこせ』

神戸の本店に帰って二・三日すると、金子さんが長崎料理の宝家で歓迎の宴を張り、若輩の私も末席に連なることを許されて、大いに感激したものである。ところが驚いたことは、その席で金子さんは芳川・日高の両先輩を差し置いて、専ら話題をまだ二十台の若僧の私に向け、私が商用で飛び廻っていたエジプト、トルコ、ギリシャ、レバノンなどの地方の事情を、実に根堀り葉堀り聞いたものであった。私は恥かしいながらこの時は金子さんの気持がつかめず、ありきたり的好奇心から質問が集中するくらいに思って、その地方の人情・気候などについて、通り一遍の応対をしていた。

ところで後年になつて気がついたことなのだが、この時金子さんは当時はまだ日本にあまり知られないか、要するに何かうまい儲け事はないかと、私を通じて知識を吸収しようとしていたのであつた。

金子さんという人は、そういう人には珍らしく、柄で、普通の人なら私などは取るにも足らぬ小僧なのだから、話を先輩の二人に向けて、一応の外国语の事情などで、お茶を濁すのが常である。しかし金子さんはそんな席でも、重点を鈴木の事業に置いて、比較的に未知の地方にいた私が何か役立つ新知識を持ってはいるのかと、『事実』（ファクト）に重点を置いて、一介白面の青才などということは、頭から問題にしなかったのである。

内地に帰つてからは関係会社の『太陽曹達株式会社』に配属された。これは『マガジ・ソーダ株式会社』が、アフリカ・ウガンダのマガジ湖の天然ソーダ灰を採集していたのを、その東洋方面での販売を一手に引き受けていたのである。このソーダ灰は硝子の原料として使用するが、これを中国では饅頭のふくらし粉に大量に使用していた。そこでこれを中国に売りこむために、やがて天津行きを命ぜられて、太陽曹達天津總理という、名前だけは物々しい地位に就いた。

支店は鈴木商店の天津出張所の一室に置いたが、その時私の助手になつたのが、後に帝人の常務取締役をつとめた古川清行である。私は中国の事情に暗いので、誰かこれに精通している人をというので、東亜同文書院を出て中国に経験の深い古川がきたのであった。

この時初めて北京に行って、中国の古い文化の跡を偲んだりしたが天津滞在は半年にも足らぬ短いものだったので、別にこれといったこともなく平凡に過ぎ、内地で私の後任になつたものがやめたので、またそこに呼びもどされた。内地に帰つたのが大正十一年九月半ばだが、さて帰任してみると殆ど仕事らしいものがない。大体が余り仕事のない会社なので、私達のところまでは仕事が廻つてこないのだ。仕方がないので毎日のように、昼飯を明海ビルにあつた如水会クラブに食いに行き、そこで三時頃まで碁を打つてうさを晴らしていた。

『使って貰えないか』
と頼みこんだ。すると有松から
『人生航路は結果だけから見て
はいけない。米の仲買などは、成
功よりは失敗の方が多いのだ。殊
に君はまだ若いし、鈴木は大した
会社だ。人間、時には日陰もあり
日向もある。慌てて職業を代える
などは以ての他のことで、今暫く
辛抱してみろ』
と懇々とさとされて、ここに私は
豁然として覚るところがあつて、
長い人生航路を乗り切るのに、徒
に一喜一憂してはならぬと、驟然
と心を入れかえたのであつた。

れだから工場が落成して、朝野の知名士を招待して社長の伊藤乙次郎海軍中将が挨拶することとなつた時には、私はその原稿を進んで引き受けた。その頃は空中審査固定については、国内には殆ど文献らしいものはなかつたので、私は英文の原書数冊と雑誌類を克明に読んで、この原稿をまとめ上げたのであるが、その出来映えが頗る良く『誰があの原稿を書いたのだ』『大屋君三だ』『大屋とはまた意外だ』と、関係者の間で注目をひいた。そうこうするうちに大正十四年に入ると、クロード窒素の事業も次第に進捗したので、八幡製鐵の排気ガスから水素をとつて、これに窒素を加えて硫安を作る大工場の建設が計画され、その建設事務所長に私が擬せられていた。そこにたまたま鈴木のロンドン支店に欠員ができて

何か特徴のある人はこれを大いに重用した。こうして鈴木商店には、無名の人材が続々と集まり、これをその持つ能力、即ちその持つ『事實』に応じて駆使し、いろいろの先駆者的な事業を、次から次へと創設していくのであつた。

この時初めて北京に行つて、中国の古い文化の跡を偲んだりしたが天津滯在は半年にも足らぬ短いものだったので、別にこれといった後任になつたものがやめたので、またそこに呼びもどされた。

内地に帰つたのが大正十一年九月半ばだが、さて帰任してみると殆ど仕事らしいものがない。大体が余り仕事のない会社なので、私達のところまでは仕事が廻つてこないのだ。仕方がないので毎日のように、昼飯を明海ビルにあつた如水会クラブに食ひに行き、そこで三時頃まで碁を打つてうさを晴らしていた。

また仕事がないままに、家に帰つては手当り次第に本を漁つて乱読した。今ちよつと思いつ出すものだけでも、綱島梁川の病間録・カライルの衣裳哲学・福沢諭吉の福翁百話・勝海舟の水川清話、それにトルストイの戦争と平和のような龐大なものもこの間に読んだ。北沢新次郎の資本主義経済学の史的発展とか、その頃出た河上肇の第二貧乏物語、さらにその主宰する雑誌『社会学研究』も毎号読んでいた。マルクスの資本論も、高畠素之の訳で難解なものを肩をこらせながら囁り、クロボト

